

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所の理念を事務所に掲示し、朝の申し送りの時に読み上げている。	法人理念に合わせ、職員が案を出しあい投票で決めた独自理念を支援の柱として取り組んでいる。法人理念については朝の申し送り時に唱和し共有と実践に繋げている。家族に対しては利用契約時に説明し理念に沿った支援の取り組みについて説明している。職員は理念の持つ意味を良く理解し利用者に接している。新入職員に対しては先輩職員が気持ち良くアドバイスを行い、一つのチームとして支援に取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域ケア会議や研修で、他の施設や事業者と密に連携をとっている。また、「子どもを守る家」の委託を受けている。地域の川掃除にも参加している。	区費を納め地域の一員として活動している。新型コロナの影響を受け地域活動が行えない状況が続いているが、民生委員中心に地域の「いきいきサロン」で知り合った地域の人々との交流が続いており、コロナ収束後には各種ボランティアの受け入れや様々な活動を再開する予定を立てている。そのような中、年頭には近くの公園で「どんど焼き」が行われホーム全員で見学をして楽しいひと時を過ごしたという。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議で、認知症についての理解や支援の方法について話をしたが、コロナウイルスの影響で、地域の人々と密に関わるのは現状では難しい。認知症オレンジカフェにボランティアで参加して、地域の方々に認知症介護についてアドバイスしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議で、認知症の事や利用者に対する対応などを発表したり、意見を求めたりしている。コロナウイルスについてや、利用者家族との対応についても話し合った。	通常であれば、家族代表、区長、民生委員、近所の方、町福祉グループ職員、地域包括支援センター職員、ホーム関係者の出席で2ヶ月に1回偶数月に行い、利用状況、行事報告、意見交換、助言等を頂きサービスの向上に繋げているが、現在は新型コロナの影響を受け昨年の4月以降書面での開催となり、ホーム内部で検討した内容を書面にして町福祉グループと地域包括支援センターに届けている。次回以降は参加メンバー全員に書面を配布するよう検討している。また、会議参加メンバーについても新たな働きかけを行う予定である。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	地域ケア会議や研修で、市町村の情報収集に努めている。会議が中止になった場合は、メールなどで常に連絡をとっている。	町福祉グループとの連携を密にし、特に、コロナの感染対策等について情報交換を行っている。運営法人の本部機能が長野市にあるため他市町村のコロナ対応も参考にしながら行政とも相談を進めてる。介護認定更新調査は調査員がホームに来訪し職員が対応している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	内部研修にて学んで、日々のケアに活かすよう努力している。現在は、防犯対策と感染症対策で、玄関に鍵をしている。	基本的に拘束のないケアに取り組んでいる。入院中に骨折をされ歩行不能になり緊急やむを得ずカンファレンスで検討して車いすの座位ベルトを安全確保のため一週間ほど使用した例がある。外出傾向の強い利用者があるが、話をしたり家族に電話をして納得をいただいている。転倒危惧のある利用者があり家族と相談の上、安全のため人感センサーを使用している。年2回、身体拘束に関する研修会を行い拘束のないケアに取り組んでいる。	

ヒューマンヘリテージ小布施

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	事業所内(全体会議)研修で学び、実践に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度については、内部研修(全体会議)で学んでいる。現在、成年後見制度を利用している利用者はいない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	新規利用者の受け入れの際、十分な説明や話し合いにより安心して利用できるようにした。また、入居説明時に解約や退居に関する説明を十分行うことで、実際の退居時に不安なく退居することができた。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	一人ひとりの利用者とのコミュニケーションを取り、率直に気持ちを表現して頂き傾聴に努め、すぐに要求に応じる努力をしている。家族からの意見や要望にもすぐに対応できるよう努めている。また毎月、家族宛にお便りを送り、普段の様子や健康面などを定期的に報告している。	利用者の平均介護度は3.0と高くなっているが、全利用者に対し気持ちを込めた声掛けを行い、表情を見て思いを受け止めるようにしている。家族の面会は7月より事前予約を頂き玄関先で10分以内の面会を行っている。県外の家族については直前にPCR検査を受け陰性の方のみ対応としている。また、1月の新年会から12月の忘年会まで毎月の行事計画に従い全ての行事を内部で行い、ホーム全体の様子や利用者一人ひとりの様子を写真に収め、毎月発行されるお便り「ヒューマンヘリテージ小布施」を家族に届けお知らせしている。合わせて管理者と看護師より手書きの手紙を出し、日々の様子をお知らせし喜ばれている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日々、職員と良いコミュニケーションを図り、自由に職員の意見が言えたり提案を取り入れ働きやすい環境作り配慮している。不安なことがないか常に相談に乗っている。半年に一度個別に面接している。	月1回全体会議を行いホーム全体の運営について、各種研修、カンファレンス、意見交換などを行い運営の向上に繋げている。この一年は新型コロナに配慮し人混みを避けるため、管理者、主任、看護師で話し合い議事録を職員に回覧していたが、現在は全員が集まり開催している。また、職員は半年に一度目標を立て自己評価を行い、賞与の時期に合わせて管理者による個人面談が行われ、様々な話し合いを行っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	管理者や職員の要望にできるだけ答えて頂ける誠実さがあり、率直に話し合いできる場を設けてくれる。本社から職員への面談に来て意見を聞いてくれることがある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	現在は、コロナウイルスの影響で研修に参加するのは難しいがオンラインの研修を受けたり、研修内容を回覧したり、研修内容を共有している。		

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナウイルスの影響で、直接訪問したり交流したりすることは難しくなっているが、連絡は密に取り合っている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人がリラックスして、安心して自分らしく過ごして頂けるよう本人の言葉に傾聴し、動作や表情から心情を察することができるよう、小さな気付きを共有し、素早く対応できるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前の入居申し込みの時点で困っている事や、不安なことを聞くことで信頼関係を気付いている。入居時に更にご家族に細かく聞く事で安心して入居して頂けるように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	在宅のケアマネと十分に連絡を取り、情報収集に努め引き続きケアを継続し、まず必要支援を十分に行えるよう努めている。家族に事前に聞き取りをしたり、本人と話をしたりして、支援につながるようになっている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人が「必要とされる、ことに喜びを感じてお手伝いをしたいと思った時は一緒に作業をして、やりがいを感じて頂く。感謝とねぎらいの言葉を伝え、持ちつ持たれつの関係を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人の日々の生活の様子、体調の変化の際は、電話か面会に来た時など、その都度お知らせして家族の意見を聞き、対応のアドバイスを受ける事もある。また、ご家族から直接本人に心配事相談の聞き役にまわってもらうこともある。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	日々の会話やレクリエーション、歌をうたう際、回想法執行時、馴染みの人や場所を思い起こして懐かしんで頂いている。	通常であれば、友人、知人、近所の方の来訪があり来訪の際にはアルバムを見て昔を懐かしんだりして楽しまれているが、現在は新型コロナ禍で中断しており、今でも電話で問い合わせがあることから収束後には再開する予定である。年末には手作り年賀状を職員と共に作成し、家族あてに出し喜ばれている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	ソーシャルディスタンスを保ちながら、距離をとってでもできるレクリエーションを行っている。意思疎通できる人達が同じテーブルについてもらい交流して頂いている。		

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他の施設に行くために退居した利用者のご家族や、ターミナルケアで退居したご家族から、暖かい言葉を頂いている。退居後も家族から電話で相談を受け、こちらからも独居家族の安否確認の電話をして交流が続いている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の口にする言葉に耳を傾け、その中から本人の意向を汲み取る努力をしている。また、それを記録に残したり、カンファレンスに活かしたりケアプランに反映している。	日々利用者に寄り添う中で飲み物等は二者択一の提案を行っている。また、毎日の洋服選びはハンガーラックに季節に合わせて幾つか吊り下げ、職員が声がけしながら選んでいただくようにしている。髪型も希望をお聞きし管理者がカットしている。日々の気づいた言動等は個人記録に纏め、申し送り確認しあい出来ることはすぐに実行し、希望に沿えるよう取り組んでいる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時に入居者の基本情報を家族から聞き取り、作成し、より本人の希望を叶えられるよう努めている。また、入居前に本人が使っていた物をできるだけ持って来て頂くようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	残存能力の把握と確認・心情の変化・通常と違う言動や行動をした場合等、記録に残したり連絡ノートに記入したりして職員全体で把握し、分析して、ふさわしい対応ですぐに応じられるよう努めている。それをカンファレンスやケアプランに反映している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	各利用者の担当職員がアセスメントしカンファレンスシートを作成し、それをもとに職員全体でカンファレンスを行う。そのカンファレンスや本人と家族の意見をもとにしてケアプランを作成している。ケアプランは記録用紙と一緒にファイルしてあり、いつでも見られるようにしている。	職員は1~2名の利用者を担当しモニタリングを行いアセスメントシートを作成の上カンファレンスで話し合い、管理者と主任がケアプラン作成を行っている。家族の希望は入居時に聞き、当初は暫定の計画を作成し1~2ヶ月様子を見て本プラン作成に繋げている。見直しは長期目標6ヶ月、短期目標3ヶ月で、状態に変化が見られた時には随時の見直しを行い一人ひとりに合った支援に繋げている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個人記録とケアプランを一緒にファイルする事で、毎日ケアプランに添った介護を行っているか確認できるようにしている。ケアプランをもとに日々の個人記録に事実の観察項目や言動を記入し、実際に対応した内容と得た情報を記入している。また日々の変化等も記録や連絡ノートに記入して、職員間で共有している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	役所の手続きの代行、病院への付き添い、本人希望による買い物代行等、ニーズに合わせて対応している。		

ヒューマンヘリテージ小布施

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナウイルスの影響で、利用者は外出することが難しいが、ホーム内で本人ができる事を考えながら、豊かな暮らしができるよう支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用者の受診については、なるべく家族に対応してもらうようにしているが、対応できない場面が多く、職員がゆだねられ受診の付き添いや主治医との連携を密に取っている。主治医が月1回ホームに往診に来ている。	医療機関についての希望は入居時に聞き、家族に決めていただいている。現在はホーム協力医の月1回の往診対応の方が大半で、入居前からのかかりつけ医の往診対応の方が若干名という状況である。また、非常勤の看護師が在籍しており、利用者の健康管理に合わせ医師との連携が取られオンコール対応となっている。歯科については協力歯科医と歯科衛生士の来訪が月1回あり、利用者の口腔管理に心掛けている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	非常勤の看護師が1名職員として勤務している。「看護師との連絡ノート」があり、看護師不在時の利用者の変化や情報・相談・報告のやり取りをしていて、職員はこのノートを毎日確認してから仕事に入る事になっている。必要があれば受診をしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	去年は1名、入院した利用者がいたが、入院前の様子を伝えたり、ドクターからの説明を家族と一緒に受けたりし、安心して入院できるように努めた。入院中、病院との連絡なども密に行った。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることができることを十分に説明しながら方針を共有し、地域関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期の対応は、それぞれの家族や主治医との相談の上、決定している。その際家族に十分に説明し、家族の希望に添えるよう努め、ケアプランはその都度見直している。今まで18名の利用者を看取っている。主治医は24時間対応してくれている。今年も1人ターミナルケアを行った。温かみのある終末期ケアを目指し、実践できた。	重度化、終末期に対する指針があり利用契約時に説明している。終末期に到った時には本人、家族の意向に沿い、医師、看護師、ホームで話し合いの機会を持ち、医師より看取りの診断をいただいた上で看取り支援に取り組んでいる。看取りになった場合、居室よりホールに移っていただき職員が24時間心のこもった温かいお世話ができるよう取り組んでいる。新型コロナ禍の状況であるが家族には面会していただき希望があれば泊まっていただくようにもしている。年2回、管理者が講師となり看取りの勉強会を行い、利用者へ寄り添う看取り支援に取り組んでいる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時マニュアルがあり、すぐに取り出せ、見れるようになっている。また、全体会議でもターミナルケアや緊急時の対応など学んでいる。実際に、急変や事故発生時に適切に対応できている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防火管理者立ち合いで職員による避難訓練を、昨年度は2回行った。今年は、昼間と夜間を想定した避難訓練を2回行った。水害時、地震時、火災時のマニュアルに添って訓練した。	今年度は昼間と夜間想定防災訓練を行った。火災想定防災訓練では出火場所を特定し消火器を使っただけの消火訓練と通報訓練を行った。水害想定では利用者全員が2階へ移動しての訓練を行い、地震想定訓練ではホーム全員の安否確認と近くの空き地まで移動しての訓練を実施し緊急時の備えとしている。備蓄として「米」「水」「非常食」などが5日分準備されている。	

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりに優しく豊かな接し方をしている。敬語を織り交ぜて会話して、尊敬の気持ちを忘れずに対応している。必要があれば居室で一対一で話を聞く事もある。	言葉遣いには特に気を付け、人生の先輩として尊敬の気持ちを持ち、基本的には「敬語」で接し友達言葉にならないようにしている。また、写真を撮るときは被り物とピースサインはしないよう徹底している。呼び掛けは本人の希望を聞き、「苗字」が「名前」を「さん」付けでお呼びしている。入室の際には「ソックと「失礼します」の声掛けを忘れないよう心掛けている。年1回行うプライバシー保護の勉強会と合わせ、毎月の管理者からの話の中でプライバシーに対する意識を喚起し支援に当たっている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の意見や希望を否定せず最後まで傾聴している。本人が恥ずかしくて言いにくい事も日頃から良いコミュニケーションを取り、言いやすい関係作りをしている。その日の洋服を自分で選んで1日に何回か着替える利用者もいる。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	1日のスケジュールはおおよそ決まっているが、一人ひとりの体調、希望に沿い、食事時間、メニュー、1日の行動スケジュールを柔軟に対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	夜のパジャマと日中の洋服の区別をしっかりとつけて、身だしなみに気配りしている。髪型をこだわる利用者に本人からの希望があれば、希望に添ったヘアカットを行っている。毎日の洋服選びも本人が選びやすいよう配置してある。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者が、お盆拭きに参加している。参加できない方も料理の話をしたり、食事の準備を見たりして「何が出るのかな？」と楽しみにしている。	自力摂取できる方が三分の一、全介助の方が三分の二弱という状況である。献立は昼食、夕食の副菜については配食会社のものを用い、ご飯と汁物はホームで調理し提供している。また、正月等にはホームで調理をしたものをプラスして雰囲気作りにも心掛けている。おやつについては「ホットケーキ」「パウンドケーキ」「煎餅」等を職員が手作りにしてお出ししている。更に、誕生日にはケーキを楽しみながら全員でお祝いしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	現在は配食サービスを昼食と夕食のみ利用している。栄養を取り入れられない方については、食事量、水分量、体重をチェックし、摂取しやすいように刻み食、ミキサー食、好きな食品など提供し、他に栄養補助食品で補っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	月1回、協力歯科医と歯科衛生士が来所し、口腔ケア指導を受けている。適したケアができるよう、スタッフ間で情報を共有している。義歯は随時消毒をしている。コロナウイルスの影響で来所できなかった時は、電話にて相談・指導してもらっていた。		

ヒューマンヘリテージ小布施

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	気持ち良く排泄できるよう定期的にトイレ誘導し、ゆとりある仕方です尿を待つよう支援している。排泄状態に合わせた、パットの当て方や方法などを常に検討している。	自立の方と全介助の方で半数、一部介助の方が半数という状況である。リハビリパンツ使用の方が多く、どのパットが合うか常に話し合い、気持ち良く過ごしていただくよう心掛けている。起床時、おやつ前、食事前の定時誘導に加え、職員は一人ひとりの様子を見てトイレにお連れするようにしている。排便については個人記録も参考に、お茶、スポーツドリンク、乳製品等で一日1,200cc以上の水分摂取に心掛け、スムーズな排泄に繋げている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	各自の排泄パターンに合わせ水分の調整、下剤の使用調整や、乳製品を毎日飲用するようにしている。また、運動不足解消に軽体操、風船バレーなど実施している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	各自定期的に入浴し、汚染時や皮膚のトラブルがある方は、その都度入浴対応している。必ず週2回以上は入浴を行っている。入浴以外では、清拭も随時行っている。	全介助の方が大半で職員二人で介助する方もおり、自立しているが見守りが必要とする方が若干名という状況である。週2回入浴を行っている。入浴拒否の方がいるが日を変えて対応している。また、同性介助希望の方がおり希望に沿えるようにしている。現在、ターミナルケアの方もいるが週2回看護師が全身清拭で対応し気持ち良く過ごしていただくようにしている。季節に合わせて「ゆず湯」「菖蒲湯」「リンゴ湯」等で季節感を味わい、入浴剤も使用し楽しめるようにしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりの希望や、スタッフが観察して休息が必要と思われる時は、ホールの居間にベッドが設置してあり、いつでも休めるようになっている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	最新の薬情報のみを入れたファイルがあり、職員全員が観覧できるようになっている。症状の変化があった場合、看護師がドクターと相談の上、処方してもらっている。薬が変わった場合、連絡ノートに記入して職員全体に周知している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	やりがいや自分の居場所を見つける事で生きがいを感じてもらうために、家事の手伝いをお願いしている。秋には栗拾いをしたり、各自できる範囲で日々のレクリエーションを行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナウイルスの影響で、外出するのは難しいため、テラスに出て外の空気を感じたり、玄関の前で花を眺めたりしている。	外出時、杖使用で自立している方が若干名で、他の多くの方が車いす使用という状況である。新型コロナの影響を受け外出や外食が難しい状況が続く残念であるが、天気の良い日には近くの公園まで散歩したりしている。また、ホームの周りは桜の花から季節に合った花々が咲き誇る場所でもあり、玄関先に出て花を眺め楽しんでいる。新型コロナ収束後にはまた計画を立てて外出を楽しむ予定である。	

ヒューマンヘリテージ小布施

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	家族から預かったおこづかいは職員が管理している。通常以外の買い物は、家族の承諾を得ている。おこづかいの明細や領収書は月1回各家族に送っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族と話したいと希望する利用者には職員が電話し、本人と代わって家族と会話してもらっている。家族や親戚からの手紙を本人に渡すか、読み上げるかしている。年賀状は一人ひとりが一言書いて家族に出している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	エアコンやファンヒーターも完備しており、適度な温度・湿度管理をしている。リビングも暖かい雰囲気になっており、壁には季節を感じさせる貼り絵や写真を飾っている。	共用部分の居間、食堂は吹き抜けとなっており開放感が漂っている。窓から外に出るとテラスやベランダがあり、天気の良い日には外気浴等で寛ろげるスペースとなっている。2ヶ所ある食事テーブルはゲームをしたり作品制作の場として一日の多くの時間を過ごしている。壁にはぬり絵、習字等の利用者の作品が飾られている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	楽しく会話したりテレビを見たり、レクリエーションを楽しめるように配慮している。また、休みたい人はホールのベッドで横になって休むことができるようになっている。ホールや居間でも、パーティーで区切れるようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	各居室にはトイレ、洗面所が設置されている。また、居室にこたつやカーペットなどを持ち込んでいる利用者もいる。	十分な広さが確保された居室は整理整頓が行き届き清潔感が感じられる。大きなクローゼットと広々とした洗面台付きトイレ、また、床暖房が設けられ暮らし易い造りとなっている。そのような中、使い慣れた家具やテレビ等が持ち込まれ自由な生活を送っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	洗濯物をたたんでもらったり、おしぼりや洗濯物を干すのを手伝ってもらったり、毎日の仕事に安全に配慮しながらできるかぎり携わって頂いている。		